

<エッセイ>リチャード・レインの春画研究：京都と春画

著者	石上 阿希
雑誌名	日文研
巻	55
ページ	2-7
発行年	2015-09-30
URL	http://doi.org/10.15055/00006459

<エッセイ>リチャード・レインの春画研究：京都と春画

著者	石上 阿希
雑誌名	日文研
巻	55
ページ	2-7
発行年	2015-09-30
URL	http://doi.org/10.15055/00006459

エッセイ

リチャード・レインの春画研究―京都と春画

石上阿希

春画のあつまるころ

この四月から「日文研」の特任助教となった。卒業論文のテーマを春画に決めてから幾年月、日文研の春画コレクションにはずっとお世話になっている。十数年前の日本では、一学生が春画の原本に触れることの出来る研究機関はほとんどなかった。しかし、なぜかここ京都には春画やあるいは春画にまつわる人々が溢れかえっており、迷える学生はその恩恵を受け続け、はてには（大変ありがたいことに）「日文研」に正式に潜り込むことに成功した。

私は学部生から院生、さらにはPD・専門研究員と長きに亘って立命館大学に所属していた。立命館大学にはアート・リサーチセンターという研究所があり、そこには春画研究の第一人者であった林美一のコレクションが収められている。その整理を手伝いながら、なんとか卒論を書き上げた後、林とともに春画研究を牽引してきたリチャード・レインの遺したコレクションを整理する機会に恵まれた。レインは山科で息を引き取り、その膨大なコレクションは彼の意向によりホノルル美術館に収められることに決まったのだが、ハワイに送る前がある程

度の整理が必要ということで春画・艶本に關してお声がかかったのである。その後、無事に全コレクションはハワイに引越し、現地の人々の目を楽しませているが、二〇〇三年頃からの約十年間、京都には日文研コレクション、林コレクション、レインコレクションと質・量共に優れた春画が集まっていたことになる。

このエッセイでは三大春画コレクションのオーナーの内、リチャード・レインのことについて書いてみたいと思う。

日本文化との出会い

リチャード・レインは、一九二六年アメリカの南部に生まれた。一八歳の時にアメリカ海兵隊に出願し、情報部専門学校に入学する。この学校では「日本を理解するため」の授業として映画「丹下左膳」などを鑑賞した。終戦後の一九四五年から一九四六年にかけて通訳として九州各地に駐屯した。帰国後、ハワイ大学に入学し西鶴の「好色五人女」に出会う。この時からレインと江戸文学ひいては浮世絵や春画といった江戸文化とのつき合いが始まる。その後、コロンビア大学で西鶴の研究を続け、文学修士号を取得している。

日本での留学生活―一九五〇〜五二年

コロンビア大学を卒業したレインは、奨学金を取得し一九五〇年から一九五二年の間、日本で留学生活を送った。この時の様々な体験が、後のレインに大きな影響を与えたといっている。この刺激的な三年間の様子は、レイン自身が、『伝記画集・北斎』（一九九五年、河出書房新社）や『定本・浮世絵春画名品集成』（一九九八年〜二〇〇〇年、河出書房新社）など

で語っている。ここではそれらの記述を基に、彼の活動と交友関係を振り返っていききたい。

留学当初、彼は東京大学と早稲田大学の学生として浅草馬道町に住んでいた。東京生活がはじまった翌年の一九五一年のはじめ頃、レインは性科学者高橋鐵（一九〇七〜七二）と出会う。しかし、この頃は学究的なつき合いではなく、主に高橋の「あそび」のお供をしていたようである。レインが住んでいた馬道町の近くには象潟町や新吉原といった花柳界があった。「華やかな花柳界の脂粉の匂いの命の躍動感、生きる喜びが満ちた雰囲気に含まれて、思いやりのある、美しい年増の女性を側にして、独り静かに黙々と杯を口に運ぶ」高橋の傍らで、レインはその趣と雰囲気を楽しんでいた。三味線を得意としていたレインは、この時小唄や俗曲も覚え、それら数々の唄を後年まで宝物として大切にしていた。

江戸の記憶が残る東京の町でレインは様々な「江戸文化」を体験していたといえるだろう。やはりこの頃交友を深めた江戸川乱歩（一八九四〜一九八七）に連れられて、湯島天神にあった茶屋に行ったこともある。この茶屋は歌舞伎の女形たちが経営していたものらしく、江戸時代というところの「陰間茶屋」であったようである。乱歩が同性愛について強く関心を持っていたことは有名であり、江戸時代の男色資料を蒐集するなど男色研究に対しても熱心であった。後年、レインと男色資料を交換している記録も残っている。

乱歩はまた、レインに画家伊藤晴雨（一八八〇〜一九六一）を紹介している。彼のアトリエを訪れたレインは多分に刺激を受けたようである。

その画家の「視覚的」な反応に、私は特に感嘆した。私が話しに持ち出した昔の江戸の事物を、ほとんど全て、即座にスケッチして―しばしばキャプションまで添えて―説明して

くれたのである。そのスケッチは、そのまま印刷にまわせるような見事なものであった。その中には、特に私のために描いてくれた大きな春画のスケッチもあった。

残念ながら晴雨のスケッチはコレクションに残されていないが、この時の印象は特に強烈だったようである。レインに「最後の浮世絵師」と言わしめた晴雨の姿は、北斎の老境への興味へとつながり、後の『伝記画集・北斎』を完成させる一つの原動力になったのである。

当時の研究テーマは西鶴であったが、浮世絵にも強い関心を持っていた。浮世絵研究家である渋井清はレインが恩師と呼ぶ人物である。一九五一年に初めて渋井のもとを訪れたレインは、渋井のコレクションの内、春画である『婦美の清書』を見せられ、絵師は誰かと尋ねられた。渋井は既にこの組物の絵師を栄昌としていたが、レインはそのことを知らず、「鳥橋斎栄里」と答えた。すると、渋井はしばらく黙したあと、「君が正しいのかもしれない」と呟いたそうである。

この後も、渋井の膨大な春画・艶本コレクションを閲覧することを許され、更には写真撮影もさせてもらっていた。ここでの経験が、後のレインの研究に大きな影響を与えたといえるだろう。

一九五二年からは、研究の拠点を京都大学に移す。京大の大学院で博士論文の準備をしていたレインは、研究を進める上で江戸の風俗習慣を詳細に学ぶ必要があると感じた。そこで、レインは当時風俗研究の第一人者であった江馬務（一八八四〜一九七九）に教えを請うため、江馬が教鞭を執っていた京都女子大学で英文学講師の職を得る。江馬のクラスで唯一の男子学生となったレインは、江戸風俗について学ぶかたわら、東京での生活がそうであったように、京

都や大阪で生きる人々やその文化と深くつきあっていった。

レインは常々、「浮世絵研究者たる者は日本にまだわずかに残っている『浮世』を可能な限り実体験すべきである」と述べていた。日本での留学生生活は、まさに自身の言葉通りの日々であったといえるだろう。多くの人に出会い、様々な文化に触れることで実感に基づく「江戸」を形づくることが可能となった。

この貴重な留学生生活を終え、帰国したレインは一九五八年コロンビア大学で博士号を取得する。その後、コロンビア大学などで日本語や日本文学、日本美術を教えた。また、ホノルル美術館の学芸員も勤めている。

春画研究のはじまり

レインは、一九六〇年代初めころから日本に住むようになる。最初の頃は浮世絵研究だけでは身が立たず、カメラマンを目指して日本各地の風景を撮っていたこともあった。しかし、一九六五年のある夜、その後のレインの研究の方向性を決定づける出会いがある。当時、レインはロンドンの出版社から『EROTIC ART OF THE EAST』に載せるための日本の性美術に関する原稿を依頼されていた。その記事を書くにあたって高橋鐵の自宅を訪れたのであるが、その場に偶然にも林美一（一九二二〜九九）が居合わせていた。レインが初めて林に会ったのは留学生時代の一九五一年に遡るが、春画研究のために緊密な交流がはじまるのはこの夜からであった。レインが「三奇人サミット」と呼んだこの日以降、林とは年に二回ほど会合を重ねるようになる。更に、研究上の問題点などは文書でやりとりをし、原本やその写真などの交換もかなり行っていたようである。そうして、レインは本格的に春画研究を始めることになった。

レインの遺したもの

一九六〇年代の日本において、春画を研究することは容易ではなかった。一九六二年には林の出版した艶本研究『艶本研究 国貞』の「参考資料」が猥褻文書であるとして起訴されている。「国貞裁判」と呼ばれたこの裁判は、決着までに一三年を要し、林と出版社は有罪となった。レイン自身も一九七〇年前後に著作の発禁処分を三回受けている。出版だけでなく、展覧会についても海外では問題のないものが、日本国内では「削除」されてしまう状況を、レインは「日本の公的機関は未だ『大人の美術』を受け入れる水準に達していない」と語っていた。

しかし、出版に関しては次第に状況が好転し、一九九〇年前後からは修正なしで図版を掲載出来るようになった。一九九五年には、林とレインの共同監修による『定本・浮世絵春画名品集成』シリーズの刊行がスタートする。各巻一冊毎に、一人の絵師の一作目を完全復刻し、翻刻・解説を加えたものであり、一三絵師二四作品と別巻が三冊刊行された。これがレイン晩年の最大の仕事となった。しかし、一九九九年に病気のために林が亡くなる。シリーズ半ばのことであった。レインは「私たちふたりにとって、日本における春画の出版の解禁は、やや遅すぎたようだ」と述べ、林の志を継ぎこのシリーズの完結をめざしたが、遂に叶うことはなかった。最後の執筆となった「芸術新潮 歌麿と浮世絵エロチカ黄金時代」が出版される直前の二〇〇二年、七六年の生涯を閉じたのである。

「偶然性によって人生は豊かになると私は思っている」。レインは人生の時々に起こる偶然を好んだ。彼のコレクションがホノルル美術館に移ったことは冒頭に述べた。しかし、たとえ一時でも二人が遺したコレクションが同じ京都に存在していた偶然を、きっとレインは喜んでいただろうと考えている。

(国際日本文化研究センター特任助教)